

# タイトル 東日本大震災後の移住者活躍の要因と効果に関する一考察

## —宮城県気仙沼市唐桑町の事例から—

大友 和佳子（JA 共済総合研究所）

Keyword：若年層移住者、協働、自治力

### 【問題・目的・背景】

2019年3月11日、三陸沖を震源とした東日本大震災が発生した。2018年時点で、震災による死者・行方不明者は1万8429人、避難者等の数は約7万3,000人であり、避難の長期化が特徴の複合大規模災害である。東日本大震災からの復興の道筋は、福島原発事故を含むことから、個人や地域によって異なる。それゆえ、一概に復興のプロセスを論じることはできないが、被害や復興の道筋から、他の地域が学ぶことは大いにあるだろう。災害復興の道筋の一つに外からの力である交流人口の活用がある。

東日本大震災後、特に沿岸地域には大量のボランティアや支援人材が流入し、交流人口を復興につなげる動きが起きた。しかし、外部の力を地域づくりにうまく取り入れた地域、外部の力を取り入れなかった地域、といったように、交流人口と地域の活力との関係については地域差が生じた。

そこで、本稿では、震災後の若年層の移住と活躍が特に著しい宮城県気仙沼市唐桑町に焦点をあて、その要因と効果、課題を明らかにし、今後の展望を描くことを目的とした。

### 【研究方法・研究内容】

研究方法は、気仙沼市唐桑町の受け入れ側住民10名、20代～30代の若年層移住者10名にインタビュー調査を実施した。調査実施期間は2016年11月から2019年7月である。インタビュー対象者の選定基準は、次の通りである。受け入れ側住民については、移住者との接点があり、普段から積極的に移住者を支えているキーパーソンを中心とした。移住者については、気仙沼市の移住・定住支援センター（MINATO）の紹介により2011年から2019年にかけて移住年度が異なるように選出した。両者については年齢・性別共にバランスが良くなることを極力注意した。

次に研究目的に対して設定した研究課題は次の4点である。

(1) 移住者側が見出している地域の魅力・地域課題

- (2) 移住者の仕事、実施している地域活動、個人的な課題
- (3) 受け入れ側住民の移住者との関わり方、具体的な支援やケアの内容
- (4) 受け入れ側住民に与えている効果

インタビューを実施した移住者の属性について表1に示した。

(表1) 移住者属性

名前	年齢	性別	地域と接点を持った年	移住開始時期	居住年数	出身地	移住前の居住地	地域と接点を持ったきっかけ
1 (K)	29歳	男性	2011年	2011年	8年	兵庫県	東京都	震災復興ボランティア団体
2 (N)	27歳	女性	2011年	2018年	8年	東京都	東京都	震災復興ボランティア団体
3 (S)	35歳	女性	2011年	2011年 (まだ住民票は移していない)	8年	大阪府	大阪府	震災復興ボランティア団体
4 (K)	36歳	男性	2012年	2013年	6年	長崎県	京都府	震災復興ボランティア団体
5 (K)	26歳	女性	2014年	2015年	4年	富山県	宮城県	大学時代のまるキャン
6 (K)	26歳	女性	2015年	2016年	3年	宮城県	宮城県	地方移住を考えていた際に、知人に唐桑を紹介される。
7 (O)	26歳	女性	2016年	2017年	2年	宮城県	秋田県	気仙沼市で若い人が活躍しているのを知っていたので、行ってみたいと思っていた。
8 (N)	21歳	女性	2016年	2018年	2年	山口県	広島県	広島犬のからくわ丸サークル
9 (W)	21歳	女性	2015年	2018年	2年	神奈川県	神奈川県	大学時代のまるキャン(ボランティアの授業にまるオフィスの人が来てもらって配った)
10 (O)	21歳	女性	2018年	2019年	1年	山形県	山形県	復興庁の支援のインターン

出所：著者作成

移住者の属性は、年齢は20代が多く全国から訪れている。唐桑町と接点を持ったきっかけは、2013年までの移住者4名が震災ボランティアである。2014年以降の移住者は、(社)まるオフィスが主催の大学生向けワークキャンプや、気仙沼市の移住者活躍のロコミで集まってきている。次にインタビューを実施した受け入れ側住民の属性について表2に示した。

(表2) 受け入れ側属性

名前	年齢	性別	居住地	職業	移住者と接点を持ったきっかけ・現在の関わり
1 (T)	75歳	男性	唐桑	元遠洋漁業	震災時に瓦礫撤去などの面で助けてもらう。以来、まち歩きと一緒に行動などまちづくり活動を一緒に続けている。食事などに誘うことも。
2 (O)	74歳	女性	唐桑	工場経営(自営)	震災時にボランティアの活動拠点となる事務所を提供し、人脈なども紹介した。
3 (M)	70歳	男性	唐桑	元遠洋漁業・ユースホステル経営	震災時にユースホステルなどを活動拠点として開放。
4 (K)	70歳	男性	唐桑	郷土歴史家・観光コンベンション協会会長	震災時に活動拠点として自宅を開放。
5 (B)	70歳	男性	唐桑	元公務員	震災後に若年層のボランティアが絶望の淵から救ってくれた。一緒に家の修理などを手伝ってくれた。その後、かえる塾という塾を開塾し、唐桑に訪れる人々の集まることのできる交流拠点を作っている。
6 (I)	64歳	男性	唐桑	公民館館長	震災後に地元のミニコミ誌を作る移住者の活動に協賛金を出したことがきっかけ。
7 (S)	39歳	女性	唐桑(震災後Uターン)	デザイン会社(自営)	2012年に東京で出会い、移住者の活動のロゴを作成する。それ以来、移住者の活動のデザイン面を担当。
8 (S)	39歳	男性	唐桑(Uターン)	わかめの卸売(自営)	震災直後、特に関わりはなかったが、2018年から一緒に地域づくりサークルを始める。移住者と話している方が面白い。
9 (T)	34歳	男性	唐桑	農家(自営)	震災直後は特に関わりはなかったが、2014年頃に出会い、それ以降一緒にまちづくりサークルをしている。
10 (K)	26歳	男性	唐桑(2018年Uターン)	わかめの卸売(自営)	高校生の時に、震災を契機に大学生のボランティアが大量に入ってきて一緒にまちづくりを行う。

出所：著者作成

唐桑町の場合、移住者の面倒を積極的に見ているのは年配の層(50代~70代)が多く、ボランティア流入時にお風呂や活動拠点となる空家を提供するなどの関わり方を行っている。一方、20代~40代の若い層は、若年層移住者の活動に刺激を受け、共にまちづくりを推進する仲間としての関係である。

[研究・調査・分析結果]

それでは次に調査結果と考察に移りたい。先ず、移住者が見出している地域の魅力と課題を表3に示した。

(表3) 移住者が見出している地域の魅力と課題

名前	魅力を感じている点(移住を決めた理由)	感じている地域課題
1 (K)	挑戦のしがい。居心地のよさ。責任感が発生する。協力して挑戦する。コミュニティと挑戦できる環境の両方があるところ。	戦略的に地域の未来を描くことのできる人材育成。
2 (N)	地域の一見、効率的ではない暮らし方や地域の文化。魅力はたくさんあるが、地域の人が気づいていない。人のあたたかさにも魅力を感じている。	子供が減っていること。若い人の人口流出。
3 (S)	唐桑は自治の力が強く、何でも自分でやってみようという行動力がある。人々も暖かく、お人よし。人を仲間はずれにせず、困っている人をほっておけない。受け入れてくれるところ。	地区社協は住民と市の社協の間にある。重要な役割であるにも関わらず予算が減少している。
4 (K)	自然環境。	地域経済の在り方、新しい産業がまわる経済循環のしくみが必要では。
5 (K)	居心地がいい。チャレンジする機会をいっぱい与え、何かすることを積極的に応援してもらえる。	町の中には居場所のない人や不満を抱えて生きている人もいる。そうした層にどう働きかければいいのか。
6 (K)	新鮮な野菜や魚介類を食べることができること。人の温かさや優しさ。家族のように面倒を見てもらえる。	地産地消を支えている、生産者の平均年齢が80歳であり高齢化していること。直売所の継続も難しくそうなど。
7 (O)	人に魅力を感じている。共感できる、頼れる仲間がたくさんいること。先に移住した人々が人をつなげてくれる。すでに地域と移住者との関係がある。	地域で産業を興すことのできる人材が必要なのではないか。
8 (N)	引越してから家族のように。電話もよくかかってくる。みんな気にかけてくれる。人に一番魅力を感じている。	若い移住者との関係は地元の年配の人との関係が強く、地元の若い層とのつながりは薄いこと。地元の若い人たちがまちづくりに参加するようになるためにはどうしたらよいか。
9 (W)	規模が小さいので、実生活に実感ももてる。もともと地域で子供を育てる文化があるところ。	まるオフィス、中学校、公民館の連携で進めている教育の事業がどう定着していくのか。小学校の統廃合など。
10 (O)	人に魅力を感じている。応援してくれる人が多い。チャレンジしやすい。	家族のように関係が近い分、プライベートの内容も周りに広がりやすく、そういう部分があればもう少し唐桑町に住みたいと思う若い層も増えるのではないか。

出所：著者作成

移住者が見出している地域の魅力には、

- (1) チャレンジを応援してくれる環境・仲間
- (2) 居心地のよさ、利他のコミュニティ、家族のように面倒を見てくれる
- (3) 伝統行事や暮らし方などの地域文化
- (4) 地域で子供を育てる環境がある。

移住者が感じている地域課題には、

- (1) [子供や若年層]：学校の統廃合の問題、子供の数の減少、若年層の人口流出など。まちづくりに若年層を十分に巻き込むことができていない。
- (2) [人材]：戦略的に地域の未来を描くことのできる人材育成
- (3) [コミュニティ]：コミュニティが狭いので、プライベートの話も広まる。距離感も取れるようになると若い人の定住ももっと増えるのではないか。
- (4) [産業]：新しい産業、産業を興すスキルのある人材を呼び込む、育てることである。

次に移住者が従事している仕事、地域活動、個人的な課題を表4に示した。

(表4) 移住者が従事している仕事・地域活動・個人的な課題

名前	名前を替えている仕事	仕事はどのような業種にしたか	現在の収入(万円)	現在の収入	所属している地域活動	個人的な課題	今後の希望や課題
1 (K)	住まるオフィス	2011年～2013年 気仙沼市のまちづくり推進事業で職に就き、2014年～一般社団法人住まるオフィスの立ち上げ	15万～30万	学生	祭り参加・地域の漁業体験プログラム、若者魅力化プロジェクト	今後の事業の展開方向、地域をよりよくサポートする人材が必要だが、お金の面で悩んでいる	関係者を教育したい、
2 (N)	住まるオフィス、現在 職中	移住前から住まるオフィスで働く	20万～25万	学生	祭り参加・自治会の祭りなど	お茶を飲みながら地域の人が話を聞ける場、代してなかなか行けていない。  地域活動の参加が目的ではなくて、お茶を飲むのが好き	今まではお茶の飲み会などで生活していたが、2019年からの収入を減らす予定。自分の方で稼げるようになってほしい。  地域活動のお話を聞きたい。  地域活動の参加が目的ではなくて、お茶を飲むのが好き
3 (S)	ニュースステル / 社会福祉協議会	人の紹介(2012年4月)	15万～20万		えがおのほろなどのボランティア活動		ボランティアの活動を広く広げたい
4 (K)	木工人	自営	10万～15万	20万～25万	特に関係性は参加していない	収入をあげたい	収入をあげたい
5 (K)	図書館	3期3期目の紹介で「職中」の部・手前まで支那事務局長	15万前後	15万～20万	読書の促進活動	収入をもう少し考えたい必要はあるか	読書の促進の活動を続ける、特に考えたい
6 (K)	住まるオフィススタッフ	市の職員からそのまま職員で、最初は紹介で、	20万～25万	30万～35万	マツ協の大会、まちづくり協議会での地域活動	農家に比べて収入が低い(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい	半農半漁の仕事を、農家にならなくていい
7 (O)	気仙沼地域活動	MINATOで紹介してもらった	15万～20万	30万～35万	中産者の農場づくり	祭りや半農半漁で収入が低い(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい	地域の魅力を内側や外側で発信して収入を増やしたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい
8 (N)	まちづくり協議会	MINATOの紹介	15万～20万	学生	読書の促進活動	自分が実践している仕事で地域活動に参加したい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい	地域の魅力を内側や外側で発信して収入を増やしたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい
9 (W)	公衆館	2011年の夏(6月)から職中を営んでおと、地域の人が集まることになり、お祭り企画なども担当	15万前後	15万～20万	読書活動(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい	自分が実践している仕事で地域活動に参加したい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい	地域の魅力を内側や外側で発信して収入を増やしたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい
10 (O)	子育て事業所インテナーズ (現在、東北芸術工科大学 4年生)	インターンで、子育て事業所インテナーズ	1万～5万円(前インターン)	学生	子育ての勉強会(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい	子育ての勉強会(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい	地域の魅力を内側や外側で発信して収入を増やしたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい

出所；著者作成

移住者の仕事は、ほぼ半数は気仙沼市中心部で仕事を得ている。所得は15万～30万の範囲が平均である。実施している地域活動には、地域の伝統芸能の担い手、小中学生への漁業体験プログラム、居場所づくり、直売所支援等があり地域活動の担い手としても重要な役割を果たしている。しかし、他にも集中したいことがある等の理由で地域活動には積極的に参加していない移住者もあり、そうした選択肢もあると考えられる。

個人的な課題としては、

- (1) 地域活動と仕事とのバランス
- (2) 所得
- (3) コミュニティとの距離感

の3点が挙げられた。

次に地元住民(受け入れ側)の移住者への関わり方について表5に示した。

(表5) 地元住民(受け入れ側)の関わり方

	震災直後の移住者との関わり	2019年現在の関わり方	移住者に対しての課題	移住者に対しての支援	移住者に継続したケアをしている理由	
1 (T)	震災直後、移住者の地域に滞在する機会を多くし、その中で関係性を築いていく。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	震災直後、移住者の地域に滞在する機会を多くし、その中で関係性を築いていく。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	とても賑わっている。これからはもっと賑わってほしい。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
2 (O)	事務所を貸したり人脈を紹介したり、若年層ボランティアが活躍できるように努める	最近移住者が忙しくお茶やお酒を飲みに来る機会が減った。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	賑わっている。移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
3 (M)	直前に面会しているのはニュースステルに住んでいる層川さん中心。	直前に面会しているのはニュースステルに住んでいる層川さん中心。	今はまだがっかりしている。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
4 (K)	震災直後に家の借り手を探し、借主探しから、その後、子供の学習支援なども一貫している。	今は直接の関わりはないが見守っている。	移住者の労働提供に感謝している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の労働提供に感謝している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の労働提供に感謝している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	移住者の労働提供に感謝している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
5 (B)	震災時からボランティアで1万人受け入れ、サポート。  自分も参加している。	現在もよくつきあっている。	非常に刺激的で楽しい。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に刺激的で楽しい。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に刺激的で楽しい。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に刺激的で楽しい。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
6 (I)	移住者が始めたミニコミュニティ活動をきっかけに、その中で、公益活動も進め、移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	定期的に地元の議員さんや地域活動のリーダーと話し合っている。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	定期的に地元の議員さんや地域活動のリーダーと話し合っている。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	定期的に地元の議員さんや地域活動のリーダーと話し合っている。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	定期的に地元の議員さんや地域活動のリーダーと話し合っている。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	定期的に地元の議員さんや地域活動のリーダーと話し合っている。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
12 (B)	2012年に唐桑丸サールのロゴをデザインした。  知人の紹介で東京で出会う。	仲間として、	今の気持ちはある。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	今の気持ちはある。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	今の気持ちはある。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	今の気持ちはある。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
13 (B)	震災時には出向していた。  2018年からまちづくりサークル一貫に活動するようになった。	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
14 (T)	2011年の6月に出発。  移住者(半農半漁)の収入をもう少し考えたい(半農半漁)の収入をもう少し考えたい	今も一緒に楽しく地域活動をしている。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	非常に向上心のある移住者の人々と一緒に活動している。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める
15 (K)	震災時、表向きで震災ボランティアの活動に参加。  大卒生などいない地域なので、とても新鮮だった。  一緒に活動しながら話をする。	結局一度、表向きで震災ボランティアの活動に参加した。  大卒生などいない地域なので、とても新鮮だった。  一緒に活動しながら話をする。	地元でしかない。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	地元でしかない。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	地元でしかない。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める	地元でしかない。  移住者の生活リズムを地域に合わせるように努める

出所；著者作成

地元住民(受け入れ側)と移住者が創造している関係は注目すべき重要な点である。関係創造のスタート地点は、東日本大震災におけるボランティア活動である。当時の唐桑町では若いボランティアスタッフの力を必要としており、お風呂、寝床、活動拠点となる事務所の提供などの受け入れ支援が地域住民(自治会)レベルで積極的に生じた。ボランティアの受け入れ態勢が直ぐに整い、両者の関係がスムーズに形成された背景には、唐桑町の自治組織の強さがあり、震災時の避難訓練が十分にされていたということが大きいと言う。

一方、当時の移住者へのインタビューからは、「震災後の人々の生きる力の強さ、助け合う利他のコミュニティに心を打たれ移住を決めました」という回答が複数あり、震災時の地域の対応力、ボランティアの受け入れ態勢が、その後の移住者の定住につながっている。移住者と若年層の地元住民との関係は、震災が一旦落ち着いた2011年6月以降である。若年層の地元住民は、面倒を見る関係というよりは共に活動する仲間という側面が大きい。

次に、移住者が増えている要因、地域に与えている効果、感じている課題について地元住民にインタビューをした結果が表6である。

(表6) 移住者が増えている要因・地域に与えている効果・感じている効果

名前	移住者が増えている要因は	移住者が及ぼしている効果	現在感じている課題
1 (T)	唐桑の人たちは人を受け入れ親切なところがいいのではないかと。	若い人たちの交流で元気になる。祭りの担い手ができる。	定住できるような仕事があるのか。最初はなぜ、学歴があるのにこんなところにくるのかと驚いた。
2 (O)	唐桑の人には経済力があり、面倒を見る時間があることが多いからでは。	地域に新しい空気を入れる役割がある。これからは馴染みすぎず、外の世界とのつながりを持ちながら新しい風を入れてほしい。しがらみがないとこがよいのではないかと。	地元の人と移住者の交流が足りていないため、地元の人と移住者をつなぐお茶会のみながら交流する場所が必要であるように思う。
3 (M)	経済力があることや住民がお人よしで面倒見がいいことでは。	震災直後から地域のために、ということなので感謝している。	ノリなのか本気で定住しようとしているのかはまたわからない。地域は面倒くさいところもある。今はお茶のような目で見ていく。これから本気で定住につながるのか、どうか、ということが課題ではないか。
4 (K)	地域の海と生きる生活習慣に魅力を感じているのではないかと。気仙沼は海洋都市である。独自の生活文化もある。	地元の若い人たちに影響を与えている。	受け入れ体制をどのように作っていくのか。震災の時は労働を提供してもらった。これからは何を求めようか。
5 (B)	今は人と人が親をわって話す時間が減ってきているのではないかと。ここに来る若い人たちは地域の人々と関わることが嬉しいようで、地元のお祭りも楽しそうに参加している。	非常に刺激を受けている。	復興予算が切れるので、移住者の経済的な安定が最大の課題。
6 (I)	地域にはよその人の面倒を見るような文化があり、空室もあり家も広いので、十分に移住者の面倒を見る余裕がある。	雇っていたこの地域を自覚させ、特に若い人たちにまちづくりの機運を興した。	復興予算が切れるので、移住者の経済的な安定が最大の課題。まるオフィスにずっとほしいが、本当に大丈夫だろうか。
7 (S)	まるオフィスが定期的に大学生を連れてくる。まるオフィスの員数が一番大きいのではないかと。	地域の可能性を発見してくれる。要素の中心	若い層は地域づくりに関わる時間があまりないこと。
8 (S)	既に移住者のコミュニティがあるからでは。	地域に活気が出る。	地域の若い層との接点が多く、活動が理解されずらいこと。もっと若い層との連携をしていくことが今後の課題。
9 (T)	大学生がまるキャンプなどで来た時に、地元の人がかかわりがりとても尽くす。面倒を見る。それは唐桑の文化。また、食が豊か。みんなまるまるたって帰る。	地元の人たちは地元の良さに気付けている。前かがみで当たり前の、地域に魅力があることに気が付いた。移住者の人たちが来たおかげで、自分達若い層と地域の年配の層のつながりが出来た。	地元の人たちが魅力に気づいた後、どんな行動を起こしていくか、という部分。地元の人、それを産業に変えていくスキルはない。地域の魅力を手頃なレベルに伝えていく、ということはわりと達成できている。
10 (K)	課題があることをチャレンジだと感じている。	一回は地元を出たが、移住者の方と地域活動をした時間が楽しくリターンをした。地元でできない人が地元のためにがんばっている姿を見て嬉しかった。自分も地域のために何かしたいという責任感が生まれた。	地元の人たちはみんなここに仕事があるから住んでいて休日は仙台や東京にいたりする。地元の良さを伝えて、こういう風に魅力を感じている移住者の存在がある、ということ伝えていきたい。

出所：著者作成

若年層移住者が活躍し増加している要因については、全体の考察を踏まえ、最終節でまとめる。

今後の課題としては、

- (1) 震災復興の財源が終了するため、若年層移住者の活動を支える財源の確保
- (2) 移住者によって発見された地域の魅力を新しい産業に変えることのできる人材やスキル
- (3) 移住者と地元の若い層とのネットワーク
- (4) 移住者と地元住民のコミュニケーションの場が挙げられた。

移住者が及ぼしている効果には、

- (1) 高齢者が多い地域なので、若い人の存在が高齢者の活力になる。
  - (2) 地域の魅力を発見し発信することで、地域の人々が希望を持つようになり活力につながっている。
  - (3) 若い地元住民のまちづくりへの関心を引き起こし、若い人々のサークル活動（唐桑丸サークル）が生まれた。
- 等が挙げられた。

**【考察・今後の展開】**

最後に、こうした移住者の継続した活躍を可能にして

いる要因と今後の課題について総括したい。活躍の要因には、

- (1) 遠洋漁業を中心産業としてきた漁村特有の共同体の在り方。世界の情報や人などを受け入れる開放的な共同体の在り方。
- (2) 住民自治の力、助け合いの文化（住民が主体的に移住者の活動をサポートする）
- (3) 継続して大学生を地域に呼び込み、移住者支援の活動をしている（社）まるオフィスの活動
- (4) 震災を契機として出来た移住者と地元住民（受け入れ側）の強い絆・協働の関係
- (5) 活躍している移住者のモデルと仲間（ネットワーク）、チャレンジを応援する機運等のいくつかの要因がある。

唐桑町の事例から、移住者を地域の活力につなげるために必要な普遍的な要素として、次の3点を仮説として抽出したい。

- (1) 自治力や助け合いの文化。コミュニティレベルでの住民の受け入れ体制の強化
  - (2) 継続した若年層と地域の接点づくりとサポート
  - (3) チャレンジを応援する環境と仲間が
- である。

以上の仮説について、他の地域の実践事例への比較検討を通し、検証していくことが今後の課題である。

**【引用・参考文献】**

[1] 秋田典子 (2018) 「移住と交流人口の増加による地域活性化」, NETT. No. 102

[2] 沼尾波子 (2017) 「都市と農山村の新たな「対流」～若年世代の移住・交流とその支援策」, 地方議会让人

[3] 田口太郎 (2018) 「移住者、関係人口を地域の活力にどうつなげるか」, NETT No. 102

[4] 中島正博 (2014) 「島根県海士町の取り組みから見た定住政策の課題」, 経済理論

[5] 谷垣雅之 (2018) 「消滅可能性自治体への移住者誘因に関する定量分析」, 農村計画学会誌 Vol. 36, No. 4

[6] 岸田安沙美 (2018) 「田園回帰のプロセスにおける移住者支援組織の役割に関する研究」, 兵庫自治学, vol. 24